

安曇野河川敷のウチワサボテン (第 223 回例会報告を読んで)

宮崎 弘規*

長野県植物研究会第 223 回例会報告 (会誌第 53 号 p.152) に藤田淳一氏によって *Opuntia* sp. の報告がある。長野県と言えば私にとっては高冷地、このような場所に生育するサボテンはそんなに多くないのでさっそく連絡をとり生育地の画像を送っていただいた。

サボテン栽培は長い歴史があり我が国でも多くの種類が栽培されている。その多くは園芸品種だが、最近は現地採集種子に由来する株を栽培する人も少なからずいて筆者もその一人でこれまで数多くの種子を導入して栽培してきた。この現地採集種子に由来する系統は Field Number が付されておりこれから誰が何処で採集したかをすぐに出ることが出来る。この方法は種内変異を実際に見ることができ、園芸の一つの方向を示すものと言えよう。

例会報告にある *Opuntia* sp. は国内でハイウチワ (這団扇)、エンブセン (円武扇)、チヂミウチワ (縮団扇) と呼ばれる種類と予想していたのだが、その後送られてきた株は我が家で栽培しているものと花色を除いて一致した。本種は芒棘束 (細かい棘でこれが指などに刺さるとチクチク痛くて取れにくい) を持ち、上縁の棘座から数本の針状直棘を出す。冬季には体に多数の横しわを生じ、地面に張り付く (これが名前の由来か?)。花色は黄色あるいは黄色で中心部が赤くなることもある。学名は一般に *Opuntia humifusa* (Raf.) Raf. が使われるが、*Opuntia*

compressa J.F. Macbr. に含めたり、その変種として取り扱うこともある。

本種は耐寒性の強いことでもよく知られ、積雪下でも越冬する。図 1 は岐阜県高山市荘川町で見た株で積雪前には -10°C 以下に下がる地である。また図 2、図 3 は我が家の露地栽培のものである。本種は戦前から広く栽培されてきたが現在ではほとんど見ることが出来ず、寒冷地の農家の軒下などで時々見られる程度で、ある意味忘れられたウチワサボテンということもできよう。

参考文献

最新園芸大辞典編集委員会編 (1969) 最新園芸大辞典 誠文堂新光社

塚本洋太郎総監修 (1988) 園芸植物大辞典 小学



図 1 *Opuntia humifusa*
(高山市荘川町黒谷 2017 年 10 月 1 日)



図 2 *Opuntia humifusa* (2020 年 5 月 30 日)



図 3 *Opuntia humifusa* (2020 年 11 月 15 日)

* 宮崎 弘規 〒490-1111 愛知県あま市甚目寺松山 73

館

Edward F. Anderson (2001) The Cactus Family
Timber Press

<https://www.tropicos.org/name/5100401> (2020
年 11 月 15 日閲覧)